

## 第2話 僕のお父さん

小学校の時、僕はイジメられていた

無視されたり叩かれたり…

死にたいとは思わなかったけど学校に行くのはとても辛かった

イジメをするのは一部のクラスメートだけだったけど

他の子たちは自分もイジメられるのが怖くて誰も助けてはくれなかった

ある日授業で『自分のお父さん』の事について作文を書く授業があった

先生は「何でもいいんだよ『遊びに行った』とか『お父さんの仕事のこと』とかでいい」と言っていて

いたけど、僕はなかなか書くことができなかった

クラスの子たちはみんな楽しそうに書いている中僕一人教室のなかでひとりぼっちだった

結果から言うと作文は書いた

書いたのだ『僕のお父さん』というテーマとは違うことを書いた

あとで先生に怒られるかも…

また、これがきっかけでイジメられるのかなと子供心にとっても不安だった

でも、それしか書けなかった



作文は授業の終わりと同時に集められ先生は『来週発表会をします』と言った  
先生はそのまま教室を後にした

その後は頭を叩かれてイジメられている階段の僕がいた

「じゃあ今日は発表会をしてもいいです」

今日は作文発表会の日

ただひたすら『僕の作文は選ばれませんように』と祈って下を向いているだけだった

発表会は順調に進みあと10分で授業も終わるころまで来ていた

僕は少し安心していたのだが、その期待は無駄だった

「では、最後に○○君に読んでもらいます」頭の中は真っ白だった

「あの先生……僕はお父さんの事書いてないです」

クラス中から非難の声が上がった

「バカじゃねえの？」

「廊下」立っているオケトコトコ

いろいろな声飛び交ったが非難の意見はみんな一緒だった

もう、どいにも逃げられなかった……

「静かにしなさいー」突然の大声に教室は静まり返った

「先生はどうしても読んでもらいたいのだからみんな聞いてください」

「とお読んでください」言われるまま僕は作文を読んだ

「僕のお父さん

僕のお父さんはいません

幼稚園の時に車にはねられて死んだからです

だからお父さんと遊んだのもどこかへ行った事もあります

それにお父さんの事もあまり覚えていません

写真があるので見ましたが覚えていません

だから、おばあちゃんとお母さんのことを書きます

お母さんは昼間仕事に行ってお父さんのかわりに働いています

朝早くから夜遅くまでいつも働いています

いつも『疲れた』と言っていますが甘いお菓子やたい焼きを買ってきてくれるのでとても大好きです

おばあちゃんは元気で通学路の途中までいつも一緒に歩いてきてくれます

「おはんはみんなおばあちゃんを作ってくれてとてもおもしろいです

お母さんが働いているので父兄参観の時にはおばあちゃんが来てくれます

みんなは『おまえの母ちゃんはババアなんだ』とからかってくるので恥ずかしかったけど

でもとても優しい、いいおばあちゃんです

だからお父さんがいなくても僕はあまり寂しくありません

お母さんとおばあちゃんがいてくれるからです

お母さんは『お父さんがいなくて』『メメント』と言ったりするので早く僕が大人になって仕事をして  
うちの家族のお父さん代わりになってお母さんとおぼあちゃんの生活を楽にしておあげたいと思いま  
だからおぼあちゃんには『懐かしいね』『さうさう言っていてお母さんにはいじも属をもんであげて  
います』

二人とも泣いたりするので少し困るけどそんなお母さんとおぼあちゃんが僕は大好きです』

一気に僕は読んだ

先生には『死んだお父さんのことを書けばいいの』『』と言われると思ったしクリスの子たちからは  
『おまえお父さんがいないのか？もしかして捨て子だったんじゃないかねえか？』とまたイジメられるの  
かと思ったりしていた

顔を上げる事もできなかった僕は救いを求めるように先生の顔を見た  
すると先生は立ったまま泣いていた…

先生だけではなかった

他の子たちもみんな泣いていた

僕が初めて好きになった初恋の子は机にうつぶして泣いていた

イジメていた子たちもみんな泣いていた

でも僕にはなぜみんなが泣いているのか分からずにいた

『さうして…お父さんがいないからお母さんとおぼあちゃんの事を仕方なく書いたの』『さうしてみん  
な泣いてくるんだ』『さうして…』

「○○君…」

「は…」

「先生は人の心がわからないダメな先生でした』『メメント』世の中には親御さんのような子もいるの  
にね…さういっ子たちの事も頭になくてお父さんの事を書いてだなんてあなたの事も知らなかった  
とはいえ本当に『めんなさう』」

先生は顔を覆ったまま泣き崩れていた

それがその日起こった出来事だった…

次の日からなぜかイジメられなくなった

相変わらず口悪くからかったりはされたけど殴られる事はなく

イジメのリーダー格の子に遊びに連れていってもらえるようになった

先生はその後の家庭訪問でその日の出来事をおぼあちゃんに話して謝っていた

作文の事は僕も話してなかったので少し怒られたけど話を聞いた母も今は「くなくなったはおぼあちゃんも  
うれし泣きみたいだね、くちやくちやの顔で叱ってくれた

僕も立派な人に誇れるような仕事はしていないけど

家族のおかげで一人前の大人のおぼあちゃんに思ふ

大人になった今でもその時の事はなぜか覚えてるしふと思いだしたりもする

これが僕が書ける自分の思い出です

